

「さあ、みんなで、考えよう」

3月に卒業する梶植地域の若者たちへ

3月に卒業されるみなさん。ご卒業おめでとうございます。この季節になると、三重県内のある中学校で3年生を担任していた長島りょうがん先生(右)からうかがった話を思い出します。3月に卒業されるみなさんへのメッセージにかえて、その先生のお話を紹介します。



ある3年生の生徒が「私は私立も受けないし公立も受けないから。絶対に学校へ行きたくない」と言いました。この子はお父さんとお母さんが大嫌いで、とにかく家から出たいと思っていました。兄弟がなく、家族から愛されていましたが、特にお父さんのことが嫌でした。「私は離れて働いて、はやくアパートを借りて暮らしたい。絶対に高校は行かないから」と言って、街の海の方にある事務所を自分で見つけてきて、4月から就職しました。みんなが高校へ行く逆方向をこの生徒は会社へ行きました。一生懸命に1ヶ月働いて、やっと給料をもらえました。「この給料でやっとアパートを借りられる。嫌なお父さんやお母さんと離れて暮らせる」と思った。給料をもらったときに、その給料袋をみたら、けっこうたくさん入っていた。明細書という給料の合計額などをかいた紙に金額が書いてあった。隠れてお金をかぞえた。どう数えても1万円多かった。社長さんが寄ってきた。社長さんは「給料にプラスした1万円は、私どもの会社では、はじめて働いてはじめてもらった給料でお世話になった人にプレゼントをしております。この1万円は研修なんです。だから、報告もしてください」と言いました。

この子はそれができるのは、嫌いでしたが親しかいなかったもので、お父さんとお母さんを日曜日にファミリーレストランに連れて行きました。「私、一生懸命働いたんやわ。この1万円でお父さん、お母さん、好きなもの食べてな」と言ったら、お母さんはハンバーグランチを注文しました。680円。「めっちゃ安いやん。私、いっぱい働いたからもっといいのをたのんでよ」と言ったら、お母さんは「いや、これでいいんです。余ったお金はあんたがつかいなさい」と言ってくれた。お父さんは、腕を組んで体を揺すって、目もあわさずに天井を見ていた。「やっぱり嫌な親父やな、くっそー」と思ったが、「お父さん、何かたのんでよ」と言うと、「おう、じゃあ、ビールくれ」と言ったそうです。「他はいいの?」というと「いい。いらん」と言って、目を合わせてくれず、体を揺すっていた。しばらくしてハンバーグランチとビールが運ばれてきました。お母さんは「おいしい、おいしい」と言って食べてくれました。お父さんは腕を組んだまま、目もあわさず、不機嫌な顔をしていました。「お父さん、飲んでよ」と言うと、「おう、じゃあ、注げ」と命令してきました。ぐっと我慢して瓶ビールを持って、お父さんが差し出したコップにビールを注ぎました。そのときにお父さんの手が見えた。お父さんの手なんかしっかり見たことがなかった。コップを差し出した手の指がすべて真っ白だった。爪の中にいっぱいセメントが詰まっていた。お父さんは私が小さいときからずっとセ

メント工場^{こうじよう はたら}で働^{はたら}いていた。冬^{ふゆ}の寒^{さむ}いときも夏^{なつ}の暑^{あつ}いときもずっとセメント工場^{こうじよう はたら}で働^{はたら}いていた。一生^{いっしょう}懸命^{けんめい}働^{はたら}いて爪^{つめ}のなかに詰^{つめ}まったセメントを見^みたときに、この子^こははじめて「ありがとう」と言^いおうと思^{おも}った。しかし、お父^{おと}さんは黙^{だま}っておけ^いばいいのに「おまえ、一人^{いちにん}前^{まえ}にな^なったと思^{おも}うなよ。おまえ一人^{ひとり}でえらそうにしと^しったらあかんぞ。遊^{あそ}ぶなよ。遅^ち刻^{こく}するなよ」と説^{せつ}教^{きょう}し始^{はじ}めた。せつかく「ありがとう」と言^いおうと思^{おも}ったのに、この子^こは腹^{はら}がた^たって、その1万円^{まんえん}をテ^おーブルに置^おいて、「わたしはもうええで、出^でて行^いくわ。1万円^{まんえん}で好^すきなもの食^たべてよ。これ、会^{かい}社^{しや}に報^{ほう}告^{こく}しやなあかんのよ」と捨^すて台^{ざい}詞^じを言^いって出^でて行^いきました。そし^して友^{とも}だちとカラオケボ^いックスに行^いって、ず^ずっと歌^{うた}を歌^{うた}って、夜^よ中^{なか}の11時^じくら^{かえ}いに帰^{かえ}りました。

夜^よ中^{なか}の11時^じくら^{かえ}いならお父^{おと}さんもお母^{かあ}さんも寝^ねている時^じ間^{かん}だ^だが、家^{いえ}に帰^{かえ}ると電^{でん}気^きがこ^こうこ^こうとつ^ついていた。リビ^よングの横^{ろく}の廊^{どう}下^かを通^{とお}ろうと^したら、お母^{かあ}さんの声^{こゑ}が聞^きこえてきた。「あのハンバ^{わたくし}ーグ^{わす}ランチを私^{わたし}はよう忘^{わす}れへん。あの子^こが一生^{いっしょう}懸命^{けんめい}働^{はたら}いて、そして私^{わたし}にプレ^{わたくし}ゼ^{わたし}ントして^してくれた。あのハンバ^{わたくし}ーグ^{わす}ランチは一生^{いっしょう}の思^{おも}い出^でや」と言^いっていました。そし^したらお父^{おと}さんのボソ^{おと}ボソ^{おと}した嫌^{いや}な声^{こゑ}が聞^きこえてきた。「またお父^{おと}さんは嫌^{いや}なこ^ことを言^いうんやろな。嫌^{いや}な親^{おや}父^じやな」と心^{こゝろ}の中^{なか}で思^{おも}い、そ^そっと通^{とお}り過^すぎよう^とした。す^するとお父^{おと}さんが「おれはあいつ^{あいつ}の顔^{かほ}を見^みたら涙^{なみだ}が出^でそうや^やったんや。おれはあいつ^{あいつ}の目^めを見^みるこ^ことが^ができな^なかった。あいつ^{あいつ}がう^うま^まれてきたとき^きはち^ちっ^っち^ちい^い体^{てい}で^で生ま^まれて、保^ほ育^{いく}器^きの中^{なか}に入^いって^いた。あの子^こは一生^{いっしょう}懸命^{けんめい}大^{おお}きく^きな^なって^てく^くれて、そし^して働^{はたら}いておれ^{おれ}にプレ^{わたくし}ゼ^{わたし}ントして^してくれたこ^ことが、おれは幸^{しあわ}せでしか^{しあわ}たな^なか^かったんや。涙^{なみだ}が落^おち^おそう^{そう}でおれは我^が慢^{まん}して^いたんや。あの子^こがおれ^{おれ}らの子^こにう^うま^まれて^てきて、ほん^{ほん}まに幸^{しあわ}せ^{しあわ}やな」と言^いうのが聞^きこえてきた。この子^こはお父^{おと}さんのそ^そんな言^{こと}ば^ばなど^なき^き聞^きいたこ^ことが^がな^なか^かった。中^{ちゅう}学^{がく}校^{こう}を卒^{そつ}業^{ぎょう}して、春^{はる}、は^はじ^じめ^めて^てき^きくお父^{おと}さん^{さん}の言^{こと}ば^ばにこの子^こはそ^そこに立^たっ^って^てい^いるこ^ことが^ができ^きません^んで^でした。走^{はし}って階^{かい}段^{だん}を駆^かけ上^あがり、頭^{あたま}から^から^らふ^ふとん^{とん}をか^かぶ^ぶって、お^おお^おな^なこ^こえ^えな^なな^なみ^みだ^だと^とう^うか^かあ^あさん^{さん}へ^への^の憎^{にく}しみ^みの^の涙^{なみだ}で^でなく、は^はじ^じめ^めて心^{こゝろ}から感^{かん}謝^{しゃ}する^{する}涙^{なみだ}で^でした。次^{つぎ}の朝^{あさ}、会^{かい}社^{しや}に行^いくとき^きに、お父^{おと}さん、お母^{かあ}さんには^はじ^じめ^めて大^{おお}きな^きこ^こえ^えで「今^{いま}まで^{まで}あ^ありが^がとう^うご^ござ^ざい^いました」と言^いえ^えました。そし^したらお父^{おと}さん^{さん}は相^{あい}変^かわ^わら^らず顔^{かほ}も見^みず^ずに後^{うし}ろ向^むき^きで手^てを^をあ^あげ^げた。でも、後^{うし}ろ姿^{すがた}でもお父^{おと}さん^{さん}の思^{おも}い^いがよ^よくわ^わか^かった。そし^して会^{かい}社^{しや}に行^いって、社^{しや}長^{ちやう}さん^{さん}に報^{ほう}告^{こく}した。「社^{しや}長^{ちやう}さん、私^{わたし}はた^ただ^だ泣^ないて^いば^ばかり^りで^でした。は^はじ^じめ^めて父^{ちち}親^{おや}の言^{こと}ば^ばを^を聞^きき^きました。私^{わたし}がう^うま^まれて^てきて、親^{おや}がし^しあ^あわ^わせ^せや^やった^たと^と言^いって^てく^くれた^たそ^その^のこ^こと^とば^ばで、心^{こゝろ}から私^{わたし}は感^{かん}謝^{しゃ}し^しました。や^やと^と親^{おや}に^に対^{たい}する^{する}気^き持^もち^ちも^も変^かわ^わり^りま^ました。」と^と言^いうと、社^{しや}長^{ちやう}さん^{さん}が私^{わたし}を^を窓^{まど}際^{ぎわ}に^に呼^よび^びま^ました。窓^{まど}際^{ぎわ}から太^{たい}陽^{やう}の光^{ひかり}が^が差^さし^し込^こんで^いま^ました。社^{しや}長^{ちやう}さん^{さん}は「こ^ここ^こにお^おま^まえ^えの影^{かげ}が^があ^ある^るだ^だら^らう^う?影^{かげ}が^があ^ある^るこ^こと^とに^に気^きが^がつ^ついた^たこ^こと^とあ^ある^るか^か?」と^と言^いいま^ました。社^{しや}長^{ちやう}さん^{さん}は「あ^あん^んた^たは^はこ^この^の影^{かげ}で^でい^いか^かさ^されて^てい^いる^ると思^{おも}って^てほ^ほしい。あ^あん^んた^たは^は一^{ひとり}人^{にん}じ^じゃ^ゃな^ない。何^{なに}か^かあ^あつ^つたら^ら影^{かげ}が^がみ^みん^んな^な、あ^あん^んた^たを^を支^さえ^えて^てく^くれて^いる。一^{ひとり}人^{にん}じ^じゃ^ゃな^ない^いよ。仕^し事^{ごと}も、こ^これ^れか^から^らの^の長^{なが}い^い人^{じん}生^{せい}も、そ^そう^う思^{おも}って^てほ^ほしい。」と^と言^いいま^ました。社^{しや}長^{ちやう}さん^{さん}は^はさ^さら^らに「『^おかげ^が』の^のま^まえ^えと^とう^うしろ^ろに『^お』と『^さま^ま』を^をつ^つけ^ける。そ^そう^うす^すると『^おか^かげ^がさ^さま^ま』と^とい^いう^う言^{こと}ば^ばに^になる。こ^これ^れが^が我^わが^が社^{しや}の^の社^{しや}訓^{くん}です」と^と言^いいま^ました。こ^この^の子^こは、何^{なに}か^かつ^つら^らい^いこ^こと^とが^があ^あつ^つたら、親^{おや}の^のこ^こと^とも^も思^{おも}う^うし、影^{かげ}を^をふ^ふと^と見^みたり^りし^します。そ^そう^うす^すると、「私^{わたし}は^は一^{ひとり}人^{にん}じ^じゃ^ゃな^ない^いん^んだ」^だと^と思^{おも}える^る瞬^{しゆん}間^{かん}が^があ^ある^るん^んです。

お話し^{はなし}の要^{よう}約^{やく}・文^{ぶん}責^{せき}・橋^{はし}本^{もと}浩^{こう}信^{のぶ}

さまざま^{しんろ}な道^{みち}路^ろに向^むか^かって母^ぼ校^{こう}と旅^{たび}立^だって^てい^いく^くみ^みな^なさん^{さん}、ど^どう^うか^かそ^それ^れぞ^ぞれ^れの^の学^{がく}校^{こう}で^で培^{つち}か^かった^たみ^みな^なさん^{さん}の^の出^で会^あい^いと^とか^かか^かわ^わり^りと^と大^{だい}事^じに^にして、心^{こゝろ}から安^{あん}心^{しん}して笑^え顔^{がほ}あ^あふ^ふれる^るこ^これ^れか^から^らの^の人^{じん}生^{せい}を^を送^{おく}っ^って^てく^くだ^ださい。み^みな^なさん^{さん}は^は誰^{だれ}一^{ひとり}人^{にん}と^として^{して}一^{ひとり}人^{にん}ば^ばら^らで^では^はなく、柘^{つげ}植^{おとな}の^の大^{だい}人^{にん}た^たら^らは、す^すべ^べて^ての^の柘^{つげ}植^{おとな}の^の子^こども^{ども}た^たら^らと^と自^じ分^{ぶん}の^の子^こども^{ども}と^と思^{おも}い、影^{かげ}と^となり^{なり}忘^{わす}れ^れず^ず続^{つづ}け^けま^ます。柘^{つげ}植^{ちいき}地^ち域^{いき}ま^まら^らづ^づくり^き協^{きやう}議^ぎ会^{かい}よ^より